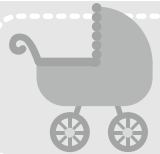


お母さんの気持ちに寄り添って

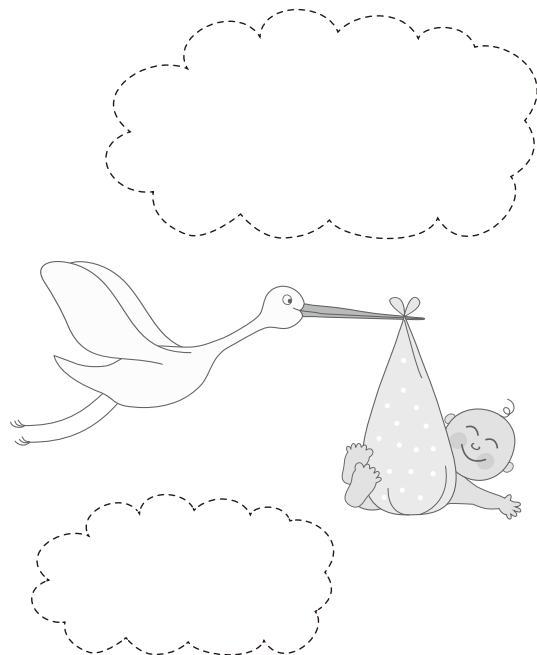
助産師 大場 美和



「助産師」とは

厚生労働大臣の免許を受けて、助産または、妊婦・褥婦もしくは新生児の保健指導を行うことをする女子をいう。これは定義です。実際は、お母さんの持っている「産む力」を引き出し、赤ちゃんが元気に生まれてくるよう寄り添い、支える仕事です。出産の介助だけでなく、妊娠中のお母さんの過ごし方、栄養の取り方、赤ちゃんの抱き方、おむつの替え方について「ママクラス」などの講習をおこないます。さらに、お父さんやその家族に対しても育児に参加してもらえようような取り組みを行っています。

また、不妊治療の相談、学校に出向いて性教育を行うこともあります。仕事の範囲は広く、女性のライフスタイルに合ったサポートを行うことが大切になります。



助産師になるには

まず看護師の資格が必要です。高校を卒業してからの進路としてはいくつかあります。

看護系大学に進学して、
助産師になるための学科を
専攻する。

看護系短大に進学して、
助産師養成所で学ぶ。

看護師養成所に進学して、
助産師養成所で学ぶ。

いずれにしても、看護師国家試験に合格した上で、助産師国家試験を受けることになります。国家試験の合格率は90%以上です。助産師養成が少ないため、国家試験に合格するより、助産師養成所に入学する方が大変です。



助産師養成所で 学ぶこと

養成所では、助産診断、助産技術学、助産管理学、地域母子保健を学びます。助産診断というのは、妊娠の経過が順調であるか、出産のときお母さんに異常はないか、お腹の赤ちゃんは元気なのかをいろいろな情報から判断することです。これはお母さんのお腹を触ったり、赤ちゃんの心音を聞いたり、五感を全て使って診断し、次にどのような事が起こるかを考えます。助産技術学は、実際に出産施設で10例の出産に立ち会い、介助を行います。もちろん初めから全てが出来るわけではありません。先輩の助産師、指導者と一緒に行います。

助産管理学は、災害時の母子の支援や、医療安全についても学びます。

地域母子保健は、保健・医療・福祉関係者と連携・協働する方法を学びます。出産したあとは地域に帰ります。育児が楽しく、安全に行えるよう、保健センターに情報を提供する事もあります。

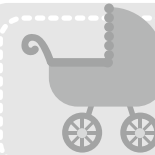


助産師の 働く場所は

助産師国家試験に合格し免許を受けると、主に産科病院、産婦人科の診療所、保健所、家庭、各市町村の母子健康センターで働きます。また助産師は医療法で開業権が認められていますので、自分で開業し妊娠、分娩、産後の管理をおこなう事ができます。妊娠中の経過が順調なお母さんの自然分娩には助産師のみで立ち会うこともできます。帝王切開や薬を使つての分娩は、医師の

立ち会いや指示が必要になります。

私は、年間約1000例の出産を扱う産婦人科の診療所で働いています。婦人科の手術や不妊治療も行っています。



助産師になって

私は高校を卒業して、看護師養成所に進学し、助産師養成所で学ぶコースを選択しました。母の勧めもあり、看護師になろうと思いましたが、看護学校在学中の臨地実習(学校で基礎看護学を学び、その後病院・施設で実際患者さんを受け持たせてもらい、看護の実際について学ぶ)で助産師さんの優しさに触れる場面があり、助産師になりたいと思い、現在に至っています。

出産では、お母さんと赤ちゃんの2つの命を守る責任があります。常に先を考えながら働いています。嬉しいこと、悲しいこと、いろいろなことがあります。今までの助産師経験の中で、一番嬉しかったことは、予定日の前日まで元気だった赤ちゃんが、何らかの原因でお腹の中で亡くなるという悲しい出来事が起こったあと、お母さんは「次の赤ちゃんは望まない」と言っていたのですが、2年後に妊娠され、その経過は順調で出産に立ち会うことができました。元気な赤ちゃんでした。

最後に、助産師はいろいろな出産に立ち会わせていただくことが主な仕事になりますが、お母さん、家族みんなの気持ちに寄り添うことが大切になります。

そのためには、日々勉強です。

